

公開講演会

“2020東京オリンピック・パラリンピック開催決定”

これから7年間、私達は何に取り 組まなければならないか

—日本のスポーツ界は1964東京オリンピックに何を学ぶべきか—

コーディネーター **杉山 茂** スポーツプロデューサー

パネリスト **佐藤 次郎** 東京新聞＝中日新聞東京本社＝編集委員
兼 論説委員

福田 富昭 公益財団法人日本レスリング協会会長／
国際レスリング連盟副会長)

ヨーコ ゼッターランド 嘉悦大学准教授

プランニングオフィサー **上柿 和生** スポーツデザイン研究所代表

マネジメントディレクター **沼澤 秀雄** 立教大学ウエルネス研究所

日 時:2014年1月11日(土) 14:00～16:30

場 所:立教大学・池袋キャンパス 11号館 AB01 教室

参 加:本学学生、教職員、一般 110名

【開催主旨】

東京開催が決まった第32回夏季オリンピック・第16回パラリンピック大会。それに向けて、日本のスポーツ界、大学スポーツ関係者が取り組まなければならない課題のテーマは山積しています。それは、競技力向上に向けた研究への取り組みと施設整備、ジュニア世代育成への支援と指導体制の確立、青少年のスポーツ国際交流と平和の研究、オリンピックムーブメント教育普及への取り組み、スポーツ文化醸成への研究実践活動、スポーツボランティア人材育成のプログラム開発、等々その内容・分野は多岐に亘ります。

この公開講座では、2020年五輪開催で日本スポーツ界、大学スポーツが抱える課題は解決されるのか、様々なテーマを掘り起こしながら、「2度目」の五輪開催の意義を問いたいと考えます。

【プログラム】

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 13:30～ | 受付・開場 |
| 14:00～ | オープニング |
| 14:05～ | 開 会・「テーマ主旨」の説明 |
| 14:10～ | 2020年五輪招致決定から現在まで |
| 14:25～ | パネルディスカッション |
| | ◇国際スポーツ界は日本に何を期待したのか |
| | ・1964年のレガシーは何だったのか |
| | ・「スポーツ立国」とはどのような姿か |
| | ・「スポーツ庁」の見通しと課題 |
| | ・「スポーツ庁」へのスポーツ団体の対応 |
| | ・パラリンピックをめぐって |
| | ◇「大学スポーツ」の今後 |
| | ・2020年五輪開催で日本スポーツ界宿年の課題は解決されるか |
| | ◇2020年はどのような大会になるか(全員) |
| | ・施設問題(都内大学スポーツ施設の状況と受け入れ) |
| | ・競技(ベースボールとソフトボール、レスリングの新階級) |
| | ・ボランティア(大学スポーツ人材の活用) |
| | ・チケット |
| | ◇改めて「2度目」の開催を問う |
| 16:00～ | 会場からの質疑応答 |
| 16:30 | 閉 会 |

<テーマ主旨説明(ウエルネス研究所 沼澤秀雄)>

東京オリンピック・パラリンピックが2020年に開催されることになったが、「お・も・て・な・し」ということばだけが一人歩きして、実際に6年後、東京に来る多くの種目の選手関係者、世界中から集まる観客に対してどのようにもてなすのかについては検討されていない。特にオリンピックなどの大きなスポーツイベントは運営ボランティアが必要不可欠で、どのようにしてボランティアを集め、どのようにして研修していくかなど多くの課題を残している。今回はバレーボールの指導者として活躍しているオリンピックのヨーコ・ゼッターランドさん、レスリング協会会長で今回の招致委員会副理事長の福田富昭さん、多くのスポーツを取材してスポーツ文化について提言されている、東京新聞の佐藤次郎さん、進行役として元NHKスポーツディレクターの杉山茂さんをお招きして、いままでもあまり関心を示してこなかった「大学」から2020年に向けてムーブメントを起こしていこうという企画をたてた。今回は順天堂大学の東京啓友会に講師をコーディネートしていただき、立教大学ウエルネス研究所と共催というかたちでシンポジウムを開催する運びとなった。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催決定

—これから7年間、私達は何に取り組まなければならないか—

2013年9月7日のIOC(国際オリンピック委員会)総会において、2020年のオリンピック・パラリンピック開催都市を決定した。最終投票では60対36でイスタンブールを上回り、終始、他の都市を圧倒して選出された。どうしてそのような結果になったのか。(杉山茂)

<なぜ、招致が成功したのか>

IOC総会の投票は人間がするものである。基本的にはIOC委員個人に判断は任されている。候補になったマドリード、イスタンブールよりも東京に行きたいと思ったのではないか。(福田富昭)

バレーボールの国際大会が東京で行なわれることが多いことを例に挙げると、各国の選手や関係者は日本でバレーボールの大会が開催されるのを楽しみにしているということを知る。このような外国人の評判は日本のホスピタリティの高さによるところが大きい。例えば、時間に対する正確性などは高いパフォーマンスを出すのに大切である。また、何かあった時にすぐに対応してくれることも選手にとっては心強い。このように、招致の活動でなかで示された、日本のホスピタリティーが評価されたのではないか。(ヨーコ・ゼッターランド)

ロンドンオリンピックが決定したときは、翌日、バスが爆発するテロが起こった。次回のオリンピックはブラジルのリオデジャネイロであるが、治安が問題視されている。このようにIOC(国際オリンピック委員会)は常に安全な大会の運営を心配している。今回、ライバルとされたトルコのイスタンブールも直前に政治的な情勢不安の問題が出てしまった。そこでIOC理事は2020年の大会を安全に安定して運営することが期待されるであろう東京を選択したのではないか。(佐藤次郎)

オリンピックは近年、都市開発のため、国威発揚や国の存在感を近隣の地域に示すためなどで行なわれることが多いが、日本であれば、そもそもIOCが提唱している平和に祭典としてオリンピック運動にふさわしい大会にしてくれるのではないかと考えたのではないか。この期待に是非応えてい

きたい。(佐藤次郎)

これらの他に日本人のオリンピック好きが外国には知られている。深夜の生放送を大勢の観ている国はあまり無い。日本人にはオリンピックというものの自体が琴線に触れるところがあるのではない。このようなことが外国人から評判になっている。こうしたさまざまなことがあって今回の決定に至った。しかし、これに甘んじて、何もしないということではなく、これから日本のスポーツをどのようにしていくか、オリンピックまで何を考えていかなければならないかが大事である。(杉山茂)

<東京 2020 決定から現在までの動き>

開催決定から、いままで(2014年1月11日)全く動いていない。オリンピックは国開催ではなく、都市開催であるので、東京都知事がいない状況では何も決まらない。組織委員会の会長を含めて候補の人はあがっているがまだ正式に発表されていない。2月に組織委員会が発足するので、それから少しずつ動いて、経済もよくなっていくのではないか。(福田富昭)

これまでに話題になったことで印象に残っていることが2つある。一つは招致の最終プレゼンで高い評価だった佐藤真美さんに注目が集まっていることである。彼女は脚に障害を持ったパラリンピックの選手だが、明るくて、潑刺としているイメージを与えてくれた。いままでパラリンピックの見方は非常に画一的で狭かったが、パラリンピックにも豊かなスポーツ文化があり、スポーツというものは幅が広く、明るくて、いろんなかたちで楽しめ、人々に愛されるものであることを示してくれた。これから準備をスタートする号砲としてはすばらしい事だし、ずっと続いて欲しいことである。もう一つは新国立競技場をめぐる論議である。大きすぎる、お金がかかるなどの声があがっているが、この施設が東京オリンピックの象徴になっていくので、どのようになるにしてもこれからしっかりと論議していかななくてはならないと考えている。(佐藤次郎)

<スポーツ界以外の動き>

これまで反応としてはむしろスポーツ界以外のところで敏感に動きがあったのではないか。例えば東京の地下鉄は大会実施期間中について24時間走らせる方向で検討している。また、景観を考えて電信柱を地中に埋めることなどである。経済界はこの東京オリンピック・パラリンピック開催をスポーツという勝機ではなく、商機として、ビジネスチャンスとしてとらえている。これはいいとか悪いとかいうことではなく、オリンピックというものはそうゆうものになってきたということを示している。(杉山茂)

<大学生の反応>

大きなスポーツイベントが7年後に東京で行なわれるということへの楽しみや期待が学生からは感じられる。2020年のオリンピック・パラリンピックは今の大学生の年代が主力になる。もしかしたら中学生についてもニューフェイスとして活躍する可能性がある。指導者は折に触れてオリンピックに出場できることを意識して話題にすることが重要である。自国開催で選手として出場出来るということは素晴らしく幸運なことである。(ヨーコ・ゼッターランド)

<東京オリンピックは何を遺したのか>

自国で開催した事自体がレガシーである。戦後の復興がようやくかたちになってきたところでのオリンピックで日本全体が一体感があった。運営している側も、テレビを見ている側も我々のオリンピックだという意識があった。そしてそれを成し遂げたということが国民の自身になったのではないか。もう一つは、本来のオリンピック精神に則った最後のオリンピックらしい大会だったのではないか。今のオリンピックはビッグビジネスの舞台になっており、国家プロジェクトで様々なことが行なわれ、スポーツがショー化してしまっている。主役であるべき選手や競技が商品のようにになっている。しかし、東京オリンピックを振り返ると選手は選手らしく、競技は競技らしく、のどかな雰囲気で行なわれた。その精神は忘れてほしくない大切なレガシーであろう。(佐藤次郎)

<スポーツ庁とスポーツ立国について>

日本でのスポーツは自発的に行なうことが前提となっている。また体育とスポーツの違いがはっきりしていない。学校教育での競技スポーツは課外活動で行なわれている。これは好きでやっていることなので予算がついていない。すなわち学校教育を中心に実施されてきた日本のスポーツはアマチュアであり、ボランティアで成り立っていた。それからスポーツ基本法が出来て、国が責任を持ってスポーツの育成と強化を行なうことを決めてスポーツ立国をつくる基盤ができた。スポーツ庁は学校教育の体育をどうするのかについて考えなければならないし、競技スポーツについては国の予算をどれだけかけられるかが重要になってくる。現在、日本のスポーツ関連予算は235億円前後である。JOCが選手強化のために使えるのが25.8億円で、これを28団体について選手の活躍からS・A・B・Cというランクに分けて重点配分している。これ以外にオリンピック種目以外をD配分として強化費が決まっている。問題なのは、この金額だと代表選手は遠征費などの経費の3分の1を自分で出すことになる。それでは大変なのでかく競技団体はスポンサー企業を募ってそれを埋め合わせているため、選手強化よりもスポンサー捜しの仕事が多くなってしまっている。また競技団体の職員の給料は寄付金で成り立っているため、安定した職業と評価されず、優秀な人材を確保しにくいのが現状である。このような脆弱な体質を改善し、選手強化を充実させるためにJOCはスポーツ庁を提案している。(福田富昭)

外国の場合は青少年スポーツ省という名称が多い。学校教育のなかで体育は教育の1つの領域を示すものであると思うが、スポーツとは少し違う。スポーツを教育の中に盛り込んだが故に様々な問題が出てきたように思う。お金がないからスポーツ庁をとということではなくて、競技力向上から国民全体の健康を含めたスポーツというものを認識して確立していくことが必要であろう。来年度ぐらいいままでにこの構想が決まってこないと2020年をまた旧態依然とした体制で向かえることになってしまう。(杉山茂)

アメリカのバレーボール代表選手についてもスポンサー探しなど予算繰りに苦労していた。私はルーキー選手では破格といわれていたが、月収で1100ドルであった。アメリカのオリンピック委員会はこうした選手をサポートするために企業が選手と契約をして競技に専念できるOJOP(Olympic Job Opportunity Program)というシステムがあった。私も経験があるが経済面では非常に助かった。

選手の支え方はいろいろな形態があると思うが、日本でも少しずつサポートシステムが出来つつあると聞いており期待したい。(ヨーコ・ゼッターランド)

<東京パラリンピックについての期待>

現在、パラリンピックは岐路に立っている。どのようなことかというとは障害者スポーツを競技化したという方向性がでてきているということである。パラリンピックをプロ化して競技力を向上させることである。本来、障害者スポーツというものはその種目の競技力あげるためにやられているわけではない。生きていくための原動力としてスポーツしている人もいる。リハビリテーションとして身体の機能を取り戻そうとしてスポーツしている人もいる。また、スポーツそのものを楽しんでいる人もいる。そうした様々な状況の中で障害者スポーツがあるので、決して画一化してはならない。しかしながら競技化することで種目を絞る傾向がでてきており、障害のクラス分けが少なくなっている。そうした場合、多くの障害者がパラリンピックに参加することが叶わなくなってしまう。メディアも競技としてのパラリンピックを伝え、美談仕立てで取り上げるが、この状態のままでは障害者スポーツを進めていくことは間違っている。今こそ障害者スポーツをどのように進めていくかを考える時である。(佐藤次郎)

パラリンピアンの方の話や友人の話やバリアフリーが日本全国で整っていないことがわかる。諸外国に比べると競技場に行くまでが大変だからである。バリアフリーはインフラばかりではないと思うが、本当のバリアフリーの実現のためにパラリンピックが行なわれることは良いことだと思う。助成金を申請してくるのが障害者の団体が多いことを考えると、まだまだ障害者スポーツの環境は良くないと感じている。(ヨーコ・ゼッターランド)

<学校体育とスポーツについて>

日本にスポーツ競技が入ってきたのは明治であるが、いままで学校教育がスポーツを支えてきた。しかし、近年になって少子化、日常生活の忙しさ、親の影響などの問題で競技スポーツを引っ張ってきた課外活動が成り立たなくなってきた。そしてスポーツをする子どもたちの心構えと指導者の情熱が昔に比べると変化してきている。子どものスポーツ離れは深刻である。(福田富昭)

スポーツは楽しいものであるべきで子どもはスポーツが嫌いになるなわけが無い。これは大人の問題であり、大人のを考えを変えないといけない。少年スポーツ指導者は競技を上手く強くする指導者よりもスポーツを好きにする指導者が見直されるべきである。(杉山茂)

<地域とスポーツ>

アメリカのスポーツ環境と形態が違う。日本も総合型地域スポーツクラブがでてきたがまだ学校中心でスポーツが行なわれている。子どもたちの1週間のスケジュールをみると忙しすぎる。勉強との両立のためもあるが、試合が多すぎるなどスポーツ自体にも問題が多い。アメリカは比較的ゆったりしており好きなことに打ち込める。加えてシーズン制があるため、デュアルスポーツといった複数のスポーツを経験することができる。もう少し日本はゆっくりスポーツが出来る環境がほしい。(ヨーコ・

ゼッターランド)

日本のスポーツのキーワードは「地域」であると考え。誰でも、どこでもスポーツが出来る環境はとても重要である。総合型地域スポーツクラブは全く正しい方向性を持ってやられているが、内容はかたちだけのお役所仕事のような。それに魂をいれて内容を考えなければいけない。地域がスポーツに力を入れれば競技力向上にも貢献するし、子どもたちのスポーツ離れにも歯止めがかかる。(佐藤次郎)

<スポーツとメディアの関係について>

私はメディアの方から励まされた経験がある。メディアはスポーツをデリクトしてくれる大きな力があり、メディアがスポーツを押し上げる役割は大きい。選手はメディアと上手く付き合えるスマートさが必要である。(ヨーコ・ゼッターランド)

人気番組しかやらない日本のスポーツメディアは視聴者のニーズに応えていない。メディアの幅の狭さと画一性を打破しないと日本のスポーツは良くならない。そのためにはスポーツ界や選手側も変わってこないといけない。(佐藤次郎)

<2020年ほどのような大会になるか、どのような大会にすべきか>

オリンピック・パラリンピックはボランティアがいないと成り立たない。2020年は8万人のボランティアを募集する予定である。やってよかったと思わせることが大切で、主催者がそこを考えて、未成熟なボランティアを活用してほしい。ボランティアがこの大会で日本に根付くようにしてほしい。チケットについては非公式で930万枚を予定している。このうち国内で発売されるのは60~70%だろう。2018年からの発売になる。(杉山茂)

個人としては今指導をしている選手がコートにたっているということが希望である。それ以外でいうと出来るだけ多くの方がオリンピック・パラリンピックに携わってほしい。(ヨーコ・ゼッターランド)

日本が世界に対して何を発信できるかが重要である。出来るだけ多くの国民に利益を享受できるようにしてほしい。聖火リレーを工夫して多くの人に走ってほしい。開会式の入場行進はオリンピック・パラリンピックを一緒に行なうことができないか。(福田富昭)

美しいオリンピックにしてほしい。具体的には本来のスポーツの素晴らしさがわかるオリンピックらしい大会になればよい。世界の大運動会を現代にどう活かすかがわかる大会になればよい。(佐藤次郎)

<質疑応答>

この大会を契機に地域スポーツ施設を有効に活用できるようなシステムが作れないか。(宮本氏)

1964年のオリンピックではスポーツ少年団ができた。今は比較にならないほどスポーツはブームになっている。みんなでスポーツを楽しめるそれこそがスポーツ文化の醸成につながる。是非調布で活動を踏み出してほしい。自ら一步を踏み出すことが重要ではないか。(佐藤次郎)

日本サッカー協会の理念が実践されているが、障害になっているのが野球ではないか。たとえば

センバツと甲子園大会をやめることは出来ないのか。(安本氏)

甲子園大会をやめると日本のスポーツが変わるかもしれないというのはある意味間違っていないのかもしれない。しかし、やめられないと思う。ただしベースボールの考え方を凌ぐものがでてくればという期待はある。(杉山茂)

アマチュアスポーツをもう少し振興したい。(福田富昭)

昨年9月に2020年の開催が決まったことは嬉しかったが、開催されることで震災の被災者のことが忘れられてしまうのではないかという心配は無いか。(社会学部2年 近藤さん)

このオリンピックを震災復興のプラスにしたい。開催の予選会場にするか合宿会場に誘致することも考えられる。できるだけ被災地のかたに交流してほしいと願っている。(福田富昭)

どのような大会にするか論議することによって、一体感が生まれてくると思う。1964年とは違う一体感を出せればと考える。(佐藤次郎)

子どもたちがスポーツより勉強を優先してしまうのは勉強が必要なものとして確立されているからあろう。スポーツの必要性を確立するためには、どういうことが大切なのか(法学部4年 鈴木君)

ヨーロッパでは健康と美容そして社交のために大切だということは揺るぎの無いものとして確立されている。(杉山茂)

スポーツは楽しみであると同時に、体力をつけるのに必要なものである。勉強するにも体力が必要である。暴論かもしれないが、試験にスポーツあるいは体育をいれて、体力をつけることで勉強が捗ようになるのではないかと思う。(ヨーコ・ゼッターランド)

(沼澤 秀雄記)

<講師紹介>

杉山 茂(すぎやま・しげる)氏

1936年生まれ。1959年慶應大学文学部卒業、同年NHKにディレクターとして入局。スポーツ番組の企画、制作、取材にあたる。オリンピック制作夏冬12回。1988～1992年スポーツ報道センター長。95～98年長野冬季オリンピック放送機構マネージングディレクター。1998年NHK退局、フリーのスポーツプロデューサーに。その後、Jリーグ理事、2000～2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会放送業務局長など。現在、テレビプロダクション「エクスプレススポーツ」エグゼクティブプロデューサー、財団法人日本体育協会国体委員改革プロジェクトチーム座長)、東京都スポーツ振興審議会会長他。

佐藤 次郎(さとう・じろう)氏

1950年横浜生まれ。埼玉大学経済学部卒。中日新聞社に入社し、同東京本社(東京新聞)社会部、特別報道部などをへて、運動部でスポーツ取材にあたる。ソウル、バルセロナ、リレハンメルなど夏冬のオリンピックを6度にわたり現地取材。他にも世界陸上を5回現地で取材するなど、幅広く活動。運動部長を務めたのち編集委員兼論説委員。独自の視点からスポーツ人の姿を描くコラムもおよそ400回にわたって連載している。ミズノ・スポーツライター賞、JRA賞馬事文化賞

受賞。著書に「砂の王メイセイオペラ」「孤闘 越和宏の滑走10年」(いずれも新潮社)、「義足ランナー 義肢装具士の奇跡の挑戦」(東京書籍)、「東京五輪1964」(文藝春秋)など。

福田 富昭(ふくだ・とみあき)氏

1941年 富山県滑川市生まれ・日本大学経済学部経済学科卒。滑川高等学校在学中、アマチュアレスリング競技に没頭し大学へ進学。1965年の世界レスリング選手権大会において、フリースタイルバンタム級チャンピオン。同年10月の全日本レスリング選手権大会で優勝。その他、各種大会において輝かしい戦歴を残す。現役引退後、ロサンゼルスオリンピック競技大会のレスリング競技監督に就任、その後は各オリンピック競技大会において日本代表手団々長や総監督を務めるなど、長きにわたり日本スポーツ界を牽引する。昨年9月に招致が成功した「2020東京オリンピック・パラリンピック大会」招致委員会では副理事長を務める。(公財)日本オリンピック委員会では、選手強化本部長常務理事、副会長を経て、名誉委員(2013年～)

ヨーコ ゼッターランド(よーこ・ぜったーらんど)氏

1969年アメリカ (サンフランシスコ)生まれ。6歳の時、日本に移住。12歳からバレーボールをはじめ、87年早稲田大学人間科学部スポーツ科学科に入学。関東大学リーグ6部最下位にあった早大を2部優勝まで導く。91年2月に単身渡米し、アメリカナショナルチームの「トイアウト(入団テスト)」に合格。大学卒業後、4月に再渡米し正式入団。92年バルセロナ五輪で銅メダル獲得。96年アトランタ五輪7位入賞。97年ダイエーオレンジアタッカーズ(現・久光製薬スプリングス)とプロ契約。プレー。Vリーグ優勝、全日本選手権大会2連覇に貢献。99年6月、現役引退。現在はスポーツキャスターとして、テレビ、ラジオ出演のほか、講演、解説、バレー教室、エッセー執筆など幅広く活動している。ミズノスポーツライター賞選考委員、(財)日本バレーボール協会理事他。